
記憶になった日常

氷柱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶になった日常

【著者名】

Z7600Z

【作者名】

氷柱

【あらすじ】

ブレイズ達の日々の日常生活を描いた物語
ほのぼのでもふもふな生活と一緒に過ごしそうよ

「クリスマスだ！クリスマスウー！」

「正確にはクリスマスイブだけどね。」

はしゃぐサンダースと冷静に突っ込みをいれるブースター。

「今回こそサンタさんがプレゼント出来ないようなものを考えてやるう！」

Yahooo!とわめきながらサンダースは部屋を疾走してそのまま外に飛び出して行つた。

全く…朝からよくあんなに元氣だよね。

はしゃいでいるサンダースに呆れていながらもブースターもクリスマスを楽しみにしていた。

「前回の様にならなければいいけど…」

やれやれとでもいうように首をかしげてブースターは自分の部屋に戻つて行つた。

-----。

「ア～クウ～ア～！」

「うん？」川の中で優雅に朝の水浴びをしていたシャワーズは自分の名前が聞こえてきた方を向いて見る。

すると、此方に向かつて猛スピードで走つてくるサンダースの姿が…

「ストップ！ストップだつて！」

アクアの必死の制止もサンダースには聞こえなかつたようだ。サンダースはそのまま川に体ごと突っ込んできた。

「キヤーーッ！」

川に電流が流れアクラは感電してしまつ。

「あつ！ ゴメン、ゴメン！」

サンダースは川の中に突っ込んでからようやくその事に気が付いたようで急いで川の中から出でくる。

アクアもその後に這いすりながら川の中から出でくる。

「ううつ…。ライ…朝からそんなにはしゃいでどうしたんですか…？」

地面上に顔を突っ伏しながら尋ねてくる。

「何つて今日はクリスマスだよ！ 夜にはサンタさんが来るんだよ！」

「そういえば今日はクリスマスイブだったね。でも夜まだ時聞はあるよ？」

そう、今日は12／24 クリスマスイブの日。

夜にはサンタさん…まあ、デリバードさんがプレゼントを運んできてくれるんだけど ライトは毎回はしゃぎ疲れて寝てるんだよね…。だから今でもサンタさんの事を信じてるみたい。

「今日は何を頼むの？ 前回はたしか1つめの鉄球だったよね？」

そう、前回ライトは1つめの鉄球をサンタさんに頼んでいた。

本人曰く、『サンタさんはトナカイで空を飛んでやって来るんだ！ だつたら相当重たい物を頼べば空も飛べなくなる…』とのこと。翌日、ベッドの傍に掛けていた靴下は無惨にも破れ、その下の床には穴が空いていた。ライトの部屋は2階にある為、その真下にある1階のストラの部屋が落ちてきた鉄球によりかなりの被害を被つていたんだよね…。

「そりなんだよね。前回は重要な事を忘れてたんだよ！ 飛べなくとも雪の上を滑つていけばいいんだ！」

いや、突っ込みどころ満載なんんですけど…

「それより…」

ライトは先程から突っ伏しているアクアにズイッと顔を寄せせる。

「さつきは『メンね。その…やっぱり痛かった？』

今までのむじゅきな感じとつて変わって今度は両前足を顔の前でモジモジさせている。

「そつ、そんな事ないよ！ 確かに痛かつたけど…。」

アクアは慌てて顔を上げて応えるが、流石に先程の電撃は痛かつたのか顔をしかめる。

「やつぱり？ ちょっと待つて！ オレンの実とつてくるからー。」「えつ！？ 別にいいよ！」

アクアの言葉を聞く前にライトは森の方に走り去ってしまった。

「別にいいのに…。それにしてもさつき、ライの顔近かつたなあつて、何考てるんだろわたしーーー。」

いつの間にかライトとのやりとりを思いでいた自分に気付く、アクアは顔を赤らめながら首を振る。

—————。

「ここの位でいいかな」と

リーフィアはくわえていた木の実を置き、上機嫌で呟く。

此処は『緑採の森』。

木の実をはじめ、薬草や貴重な種など様々な食料や素材が採れる場所だ。

森の中央辺りは少しあけた場所があるので、そこでバトルやイベント等のもようしものをやつたりする。

「皆が好きな味の木の実は採ったし、そろそろ帰ろうつかなー」

木の実を下に敷いていた葉っぱで軽く包み、持ち帰ろうとした時

聞き慣れた声が耳に飛び込んできたので目を向けると…

「オレンの実ー！」ライトが土煙をあげながら走っていた。

「おーいー！ ライトーーー どうしたのー？」

リーフィアが傍を通過しようとしたライトを呼び止める。

「あー！ リーツ、フ！ オレンのみつ、持つてない？」

ライトがぜいぜい息をきらしながら尋ねる。

「そんなんに慌ててどうしたの？ もしかして、誰か怪我したのー？」

走ることが得意なはずのライトがこれだけ息をきらすほど急いでいるということは、余程のことがあつたのだろう、リーフィアのリーフは目を大きくあけて驚いている。

「ああ、アクアに怪我させちゃつたんだ！」
「えつ！？ アクアが！？」

「とりあえず、早くつ！」

リーフは木の実を包んだ葉っぱをくわえて 走っていくライトの後を追つた。

―――――。

「ライト、大丈夫かな…」

アクアはライトが戻つて来る迄 水に入つて体を癒していた。

アクアは自分のことよりも、ライトの事を心配していた。正確にいうと、ライトがまた誰かに迷惑をかけていいか心配しているようで ライトが走り去つた森の方向を何事も起こらないように祈りつつ、ぼお～と眺めていた。

そして、数分の後にはまた黄色いものがこんどは此方に走つてくるのが見えた。

「うそつ！？ もう戻つてきた？」

此処からあの森まで 約5キロほどあるところのライトはもう戻つてきたようだ。

そして、その後ろには縁のものも見える。

「ゴメン！待たせた！」

「アクア！どこケガしたの！？」

ライトはアクアの前に滑り込みながら止まり、リーフも傍に木の実を置いて顔を近づける。

「えつ？リーフまで？」

神様、悪い予感が当たつたようです。ライトは早速、他人に迷惑を

かけてしました！

「ライトがアクアがケガしたつていつてたの。何処が痛むの？」

「ライト…また何か勘違いさせること言つたようだね。

「いや、別に…そこまでたいしたケガじゃないよ…。実は…」

アクアはライトとの事の経緯いきさつを話す。

「なあ～んだ。って、またアクアに迷惑かけてたの？」

「うつ…ごつ、『ゴメン…』

「別にいいよ…。」

これも何時ものやりとり。

サンダースがはしゃいで誰かがその興奮状態の体にあたり、感電する…電気に弱い水タイプだから他のメンバーの中でも私が被害をうけることが多い。

「とりあえず…ハイツ オレンの実。」

リーフが集めた木の実の中からオレンの実を探りだし、渡してくれる。

「あつ、ありがとう…。」

なんともないといったが、体は全身 針で刺されたように痛むので素直にオレンの実をかじる。

モグモグモグ…。

体のだるさと痛みが少しひいていく。

「ふう～、ありがとう。だいぶ楽になつたよ。」

アクアは水をしたらせながら川の中からあがつてくる。

「よかつた」 アクアに危険なことが起こつてなくて。」

アクアが川から上がつてくるなりリーフはアクアを抱きしめる。

「ちょっと…リイ

「べつにいいじゃん

そばではライトが気まずそうに俯いている。

「あつ、そろそろお昼御飯の時間じゃない？ 家に戻る？」

この状況を開けるためにアクアは話をきりだす。

「う～ん、そうだね そろそろ帰るっか！ ほらっ、ライも帰るよ

！」

「へつー？あひ、お、おひひー。」

ライトは急に自分に話が回ってきたためあたふたしている。リーフは木の実を包んでいる葉っぱをくわえ、ライトの前に置く。

「男の子なんだから頑張つてね」

「…………。」アクアとリーフは会話に花を咲かせながら楽しそうに

歩いていた。

それに対し、後ろにはライトがついていたが口に物をくわえていたため何も喋ることが出来ず、ライトにとつてはただの苦痛な時間でしかなかつた。

-----。

「つつ、着いた。」

玄関に着いた瞬間にライトは倒れこんだ。

「お疲れお疲れ。」

リーフは木の実を持って台所の方に走つて行った。

結構重たい筈なのに、軽々ともつていきやがつた… アイツ だよな

? 何処にあんな力が…

サンダースは冬の寒氣で冷えた床の上でそんなことを考えていた。

「ライト、こんな所で寝てたら風邪ひくよ?」

アクアが心配そうに尋ねてくるので 荷物運びで疲れた体を頑張つて起こす。

「わかつたよ。」

そつ眩ま、ライトはリビングにふらつきながら歩いて行つた。

「お昼だよ~。」

-----。

ブースターのストラの声が聞こえてきた瞬間、疲れて寝ていたはず

のライトは飛び起き、食卓があるダイニングルームに走つて行く。
食卓といつても“こたつ”だけ。

「飯～＊＊」

サンダースがダイニングルームに着いた時にはまだストラしかいなかつた。

「やっぱり、今日もライが一番乗りだね。じゃあ好きな木の実取つて待つてね。」

ライトは“マゴのみ”を取つてこたつの中に入つて頭だけをだす。

「やっぱりこたつは最高～。」

サンダースが和んでいると、他のメンバーも続々と部屋にやって来た。

「えっ、もしかしたら私達が一番乗り？」

「バカな… 今夜はホワイトクリスマスになりそうだな。」

「あれ～珍しい。ライト先に来てないんだ」

エーフィのアルトとブラッキーのルナ、リーフが入つて來た。アルトとリーフはライトが先に部屋に來てない事に驚いている。

「既にそこにいますよ？」

今度はグレイシアのレイクとアクアが色々な荷物を持つて部屋に入つて来る。

こたつの周りに敷かれている座布団の一つがふくれ、その端から耳が見えている。

「なあ～んだ、やっぱりライトの方が早かつたんだね」

「もちろん！」

ライトは座布団の下から返事をする。

「これで皆集まつた訳だし、お昼御飯食べながら午後の仕事の割り振りをやつて行くよ～。」

ストラも“フイラの実”をとつて座布団に座る。

いつの間にかライトもこたつの中から出できている。

「じゃあ、いつただきま～す！」

-----。

「じゃあ、先刻話した通りの仕事をみんなこなしてね。かいさーん。」

ストラの一言で皿食を食べ終えたみんなはぞぞぞと部屋を出ていった。

「一匹を除いて。

「何で俺も残らなくちゃなんないんだよ…ブツブツ」「まあまあ、つべこべ言わず、台所にレツツゴー」

文句をいいつづけるライトをリーフは台所まで運行する。

「あつ、止めるって／＼／＼ わかつた、分かつたから！」

ライトは恥ずかしがって暴れるが、リーフの力には敵わずそのまま台所まで引っ張ってこられた。

「でも、何で俺が料理係なんだよ…他にも適任はいくらでもいるだろ…アクアとかスウとか…」

リーフが材料を取りに行っているため、いまは誰もいない台所で一人ぼやく。

俺も去年通り ツリーの飾り付けが良かつたなあ
去年のクリスマスの思い出に想いを馳せているうちにリーフも材料を持って台所に戻ってきた。

「ケーキは私が作るから、ライトはポフイン作りね」

「ムリ！ 無理、無理！ 絶対無理！」

てっきり料理の手伝いをするかと思っていたライトは全力で否定する。

「なせばなるつて」

「いや絶対なんないつて！ 俺、料理作ったことないし…」

「わかんないよ？ ライトの前世、実は伝説のポフインマスターかもよ？」

「何その無理矢理な設定！」

「ポフインの作り方教えるからちゃんとみてね」

ライトの反論は受け付けず、リーフはポフイン作りの準備を始める。

「ここにある調味料を適当にいれて…」

リーフはあらかじめ準備しておいた材料をポフインを作る鍋のような機械に入れ込んでいく…目分量で。

「次に木の実を入れる~」

木の実をそのままドボンっと鍋の中に放り込む。

「そして焦がさないようにまぜまぜ~」

こぼれないのが不思議な位、高速で材料をヘラでまわしだす。

「なんとなく出来上がったと思ったら出来上がり~」

そしてアバウトに終わつた。

「これでライも立派なポフインマスター! イエイ

リーフはワインクしながら此方を指差してくる。

「あれ? どうしたの?」

ライトは目を細めてリーフを見つめる。

「今ので料理初心者が理解出来たら凄いよ…。」

ライトは嘆息まじりに告げる。

「なせばなる

」

話がもとに戻つた! ? そして逃げた!

リーフは台所を飛び出して何処かに行つてしまつた。台所に1人、
とり残されてしまったライト。

「どうしよう… そうだ!」

ライトは何かを思いついたようで、急いで自分の部屋に向かうので
あつた…

「ライト… 大丈夫かなあ？」

「僕は楽しみですけど…」

リビングではアクアとレイクがクリスマスの飾り付けをしていた。アクアは先程からライトの事が心配で台所に行こうか迷っていた。

「ライトさんが料理するところは見たことがありますんで僕も見に行きたいのですが… いまは飾り付けを先に終わらせましょう。」「そ… そうですね。」

ライトもあんな風にみえて私よりもちゃんとしてるもんね、少しあつちょこちょいだけ…。

一人は暫く無言で飾り付けをしていく。
二人で窓の周りを飾り付けをしているところアクアが唐突に話をきりだした。

「そういうえばリーフさんは上手くいってるんですか？」「話をしだしたアクアを見ていたレイクの目は驚きで一瞬大きくなり、羞恥心からかすぐに目をそむけて飾り付けを再開する。

「レイクって面白い。リーフさんがいじりたくなるのもわかるかも。」

「…／＼／＼／＼。」

レイクの青い頬もいまでは赤くなっている。アクアが笑いながらレイクを見ていると、レイクも飾り付けをしながら聞いてきた。

「そういうアクアさんもライトさんのが好きなんじゃないんですねか？」

「えっ！？ そつ、それは…」

今度はアクアが頬を赤く染め、たじろぐ。

「目が泳いでますよ？ それに僕は結構前から知っていましたし、いまさら隠さなくて…」

「えつ…。」

「だつてアクアさんずっとライトさんのこと見てますからね。」

レイクが悪戯っぽくアクアに微笑む。

「皆に…言つてないよね?」

アクアがおどおどしながらレイクに聞く。

「別に皆、アクアさんがライトさんのことを好きなことは知ってると思いますよ?」

そつ、そんな! …じゃあもしかしたらライトにもバレてるの?

何故か自然に涙がこみあげてくる。

「どつ、どうしたんですか!?」

わからない。特に悲しいわけでもなんでもないのに涙がとまらない。「ごめんなさい! 悪ふざけが過ぎました! だから、ほら、泣き止んで下さいよ~…。」

レイクはアクアに近寄つて必死に慰める。

こんなところ 誰かに見られたら…

レイクがどのように対処すればいいか困つていると、リーフがリングに入ってきた。

うわっ、なんという バッドタイミング…。

「あれ、どうしたの?」

リーフが此方の異変に気付いたようで近寄つてくる。
ヤバイ…。

レイクは若干後退りする。

「リーフ、リーフさあ~ん…」

「どつ、どうしたの!? まさか…」

アクアがリーフに泣きつく。

リーフはこれの元凶と思われるレイクを睨む。
「うつ、誤解ですつて!」

レイクは激しく首を横に振り、自分の無実を証明しようとすると、

「問答無用! かぐ~うつー!」

リーフはレイクに『はつぱカッター』をくつ出す。

「うわっー。」

レイクは手で顔を隠す。

しかし、いつまでたっても『はっぱカッター』による痛みは訪れず、おかしいなと思つて手をじかすとリーフが目前まで迫つてきていた。

「くらえっー！」

「ぐつーー？」

リーフがレイクに『すてみタックル』をお見舞いし、レイクは飾り付け用の道具の山に派手に吹っ飛ばされた。

「やめて下さいリーフさん！ レイクさんは別に悪くありませんー。」

「えつー？」

アクアが一人の間に割つてはいる。

「実は…」

アクアは泣いていた訳をリーフに話す。

―――――。

「なあーんだ、そんなことだつたの？」

「そんなことじゅありますん！ーーー」

リーフの言葉でアクアはふてくされてしまつ。

そうじうして、いふうちにレイクが道具の山から這いずりでてくる。

「結局、僕は殴られ損じやないですか…」

先程の『すてみタックル』が余程 痛かつたのか、まだ片手で胸の辺りを押さえている。

「ええー別に損してないじゅん！ レイクって私から苛められていつもよひこんでんじゅん だからさつきのも悦しかったんじやない？」

「よひこんでないですっ！ それにリイの場合、うれしいの漢字が違つ氣がします！」

レイクは急いで立ち上がり、弁明しようとしたが脚に照明ランプの紐が絡まり派手に転ぶ。

「うわっ…」

ドタン！…ガツシャーンー！ガラガラガラ…

「ああ～あ。いくつか道具が壊れちゃったかもね。」

「つづり…。」

レイクはもう立ち上がる元気も無くなつたようだ。床に突つ伏したまま呻いている。

「へえ～、レイクさんってドMだつたんですね。」

アクアのトドメの一言を聞いてついにレイクは力尽きた。

「…とこりでわつものことだけ別に気にしなくていいと想つよ～。」

「何で…そう聞こされるんですか？」

「だつて…」

-----。

その頃、台所では

「ヘックショーンー！あうつ…ズルズルズル。」

ライトがくしゃみをしていた。

「誰かが俺の事でも噂してゐるのかな…良い噂だといいけど。」

ライトはポフインを混ぜながら呟く。

「クリスマスかあ…俺もそろそろ彼女ほしいなあ～…」

アクアの気持ちも知らずにライトはポフインを作つてゐるのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7600z/>

記憶になった日常

2011年12月25日16時47分発行